ママは僕が守る！！サバイバル母子相姦

野獣の住む危険な森を潜り抜けた一組の母子

抜け出した後の禁断濃厚セックス

ちょうど象と麒麟を両者のドデカい部分だけ掛けて混ぜ合わせたような野獣が今、僕たちの目の前に立ちはだかっている。
その姿は、まるでまだ僕たち人間の遺伝子の予兆すら存在しない太古の大陸にいた竜のようだ。

ウゴァァァァァァーーー！！

「逃げましょっ！！タケルッ！！逃げるのよっ！！」
ママは怯えた声で言う。無理もない、ママは言っても女の子。華奢なそのカラダをブルブルと震わせている。
「待ってママ！！ここは何とかなりそうだよ！コイツならいけるよ！僕に任せてっ！！！」
手ごわそうな相手。だけど僕とて負けてばかりではない。

手に持った**魔法の杖**が味方だ。

杖の先っぽから強く鋭い聖なる光が放射され続ける杖。僕はその杖を空高く掲げ、そして青白い閃光をそのまま野獣に振り下ろした！！
ブアァァァーーーーーンッッッ！！！
ウゴアァ！！グガァァァーーーーッッ！！！
グゴァッ！！グゴアァァァァァァーーーーーッッ！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・こんなことになってしまったのはきっと一つの運命。
僕たちの住む町を含む地域一帯を襲った前代未聞の自然の猛威。
衝撃的竜巻に住む場所を追い払われ、なおも続く大嵐を何とか逃れ僕ら

が迷い込んでしまったのは人間を食うことが大好きな野獣たちの住む危険な森。既に仲間の住人たちは息絶えてしまった。
　生き残ったのは、不思議なほど異色なオーラを放つ大木の根元にあった魔法の杖を見つけた僕たちだけだった。
　その後、僕たちは強力なパワーを持つ魔法の杖を頼りに野獣たちと必至で戦い、どうしようもない時は逃げ、ちっぽけな人間など今にもプチッとつぶして食べてやろうと次々と現れる野獣たちの住む森をひたすら全身全霊で駆け抜け、戦い続けた。
　汗だくで息を切らし、時には膝を屈し倒れかけながら。
　それでも、パワー、エネルギーは二人の人間が協力した場合、ただの倍増ではない。何乗にでも駆け上がりそれは僕たちを困難に果敢に立ち向かわせるだけの大きさとなるのだ。
　そして・・・・・。

「・・・・んはぁぁ・・・んくっ・・・んはぁはぁ・・・・」

・・・・・ふと、まぶしい光が木々の隙間から届いた。

　真っ暗だった森の自然たちは、光によってその緑色を鮮明に取り戻し始める。
「何だかとっても明るいよママ・・・」
　僕はつぶやく。その声には確かな喜びの気持ちが混じっている。
　昼夜関係なく鬱蒼と木々の生い茂った薄暗い森の暗闇に慣れきってしまった目を細め、僕たちは言葉を交わす。

「こ・・・ここが出口・・・なの！！？？タケル！！」

　木々の向こうに広がる空間が見えた。
「そうさ！！きっとそうだよママ！」
　僕の眼差しは精悍（せいかん）で、ママの眼差しは安堵。
　僕たちはようやくこの地獄の森から抜け出すことが出来たのだと分かった。
「良かったっ！やったぁぁぁーーーーっっ！！！」
「ははっ！！ほんと嬉しいわーーーーっ！」

最後の木々の隙間を抜けると目の前には広大な草原が広がっていた。
僕たちが目指している、自然の猛威の被害を受けていない遠くの地の人々が住む温かい町まであと少しまで近づいている予感を感じた。
暁の光は影を潜め、白くまぶしい朝の光。新しい朝だ。

「よかった！！**朝だ！！！希望だよ**ママ！！」

僕とママの目はひたすら輝きと悦びに満ちていた。
そして、僕たちは喜びを噛みしめながら、どちらが誘導するというわけでもなく森の出口のそばにあった小さな丘に上った。
しかしこの丘は、地点としてはまだ危険極まりない野獣の森の中に含まれている。
それでも、この光の降り注ぐ小高い丘には陰のエネルギーに溢れた野獣たちは上ってこない。奴らは聖なるエネルギーが嫌いなのだ。

奴らは朝が嫌いなのだ。

ほとんどやぶれてしまったシャツが窮屈に思えた僕は、勢いよく脱ぎ捨て、露出した上半身の肌に光を浴びせる。
隣にいたママはそんな僕の肩に優しく掌を当て、ゆっくりと近づく。隔たりが無くなった二人の空間。ママは優しく、これ以上ないくらいに**優しくゆっくりキスをした。**

「逞しいカラダ･･･タケルの何もかもがはっきりと鮮明に見えるの････」
疲れ果てているはずの僕の肉体。だけど決して表面ではない、上辺ではない、もっと奥の芯の方から疲弊しきったエネルギーとはまだ別の時空間にあるエネルギーがふつふつと熱く湧き起ってくる。

「ママ････僕不思議な気分だよ。**ママの裸が見たい････**」

自分でもその正体は分からない。
どこからそんな気持ちが湧いて来たのか説明がつかない。
だけど・・・それがママを、ママの肉体を求めるエネルギーであるという事実だけはちゃんと理解していた。

ママもすでに悟っていたのだろう、優しく頷き、
「タケルにこんな愛に溢れたキスが出来るなんて、まさにママがこの森で戦ってきたご褒美ねっ！フフッ！もちろんタケルにとってもそうでしょ？ねっ？？」
僕たち二人はひたすら生き抜くことだけを念頭に置いて森を戦い抜いてきた。そしてここへ来て、互いの肉体の尊さ大切さに気付いたのだ。互いのエネルギーに溢れた瑞々しい肉体に、僕らの本能は踊り騒いでいた。

「もちろんだよ！**ママのカラダはご褒美。**お互いにねっ！ありがとう！」

それは**愛**。

そしてそれと同時にストレートな**肉欲**。

だけど・・・やっぱり**愛**。

純粋な純粋な**愛**なのだ。

燦燦と降り注ぐ爽やかな朝日。
僕たちはボロボロになった衣服を小高い丘の地面の上に放り投げ、向き合っている。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。